

# 生活科・総合的な学習の時間

## 仲間との関わりを通して、対象への気づきを深める子の育成

齊藤 和貴 富山 正人

「こえる学び」とは、自分との関わりで捉え、対象との関わり方を問い直しつつ、自分自身のあり方を考える学びである。そのためには、他者や対象との関係の質、思考の質、活動の質に着目し、「子供と学習内容や学習対象、仲間、教師を媒介することで相互行為や関係を編成し、思考の結び目をつくる」メディアを布置することで、学習環境をデザインすることが大切である。それによって、子供が自分自身で学びをデザインし、他者との相互行為に開かれた学びを生成し、自分の学びを見つめる眼を育てることができる。

### 1. 生活科・総合的な学習の時間の研究テーマ

#### (1) 生活科・総合的な学習の時間の問題意識

平成29年3月、次期学習指導要領が公示された。生活科では、「自分との関わりにおいて対象を捉え」「自分の思いや願いの実現」を図るという見方・考え方を身につけることが求められている。そして、学習活動の例として、現学習指導要領の「見付ける、比べる、たとえる」からさらに「試す、見通す、工夫する」が加えられた。このことは、子供の気づきを生かし、質的に高め、具体的な活動や体験と思考の場を接続することを意味している。

また、総合的な学習の時間（以下、総合と略記）では、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の探求のプロセスを繰り返しながら、「各教科における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多角的な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の文脈や自己の生き方と関連づけて問い続ける」という探求的な見方・考え方を身につけることが求められている。そのため、「比較する、分類する、関連付ける」といった思考技法を活用することや、教科のどのような見方・考え方を活用するかを判断するメタ認知的な思考スキルを育てることも必要である。このような改善の方向性は、子供一人一人が主体性を発揮し、学び方や考え方のプロセスを重視することを強調している。このことは、生活科や総合の学習活動が、計画としての学校カリキュラムを既定の学習過程として捉え、トレースする指導に陥っていないかという反省を促す。子供の思いや願いと教師の願い、そして学校や地域の実態との緊張関係のもとで、カリキュラムを子供とともに実践的に創り上げる学習過程が重要である。

そこで、生活科・総合部では、以下の2つのことを研究の重点として位置づけることにする。第一に、他者や対象との関係の質、思考の質、活動の質に着目しながら学習活動をデザインすることである。そのためには、子供を取り巻く学習環境を広く捉え、他者と応答的に関わったり、繰り返し対象に向き合いながら試行錯誤したりすることのできる「メディア」\*1の配置に留意することが大事である。この時、メディアとは、「**子供と学習内容や学習対象、仲間、教師を媒介することで相互行為や関係を編成し、思考の結び目をつくるもの**」を意味する。このことは、主体的・対話的で深い学びの実現においても重要な視点となる。

第二に、学級固有のカリキュラムをデザインする過程に着目する。学校カリキュラムの改善とともに、学級や子供の実態に即した実践的なカリキュラムを子供とともに創るための方策とそのための視点を明らかにしていきたい。このことは、児童の思いや願いを学級の活動へと昇華し、育てたい資質・能力に着目しながら教師の働きかけを研究するこ

\*1東京学芸大学附属小金井小学校編『子どもの学びをデザインする 思考をむすぶメディア』東洋館出版、2017

とでもある。

## (2) テーマ設定の理由

上のような課題を解決するためには、それぞれの気付きや知識・情報を拠り所や仲立ちにしながらか対話を重ね、互いに補完し合い、新たな意味や活動を創発・共創する学習過程が重要である。そのため、子供が他者との出会いや対象と深く関わり合う活動、あるいは振り返りの場をデザインすることは、教師にとって重要な支援であり役割である。

その一方で、本校の児童の実態として、新たな活動に踏み出すことに対して消極的であったり、他者からの指示を頼りにして自分なりの判断をもてなかつたりするなど、自分の既有経験の範囲で満足してしまう傾向が強いことが課題として指摘されてきた。子供にとって、自分自身のありたい姿を見付けたり、学びや成長を振り返ったりすることは簡単なことではない。むしろ、他者との関わりを迂回して可能になることも多い。そのため、活動的な学びである生活科や総合において、主体的・対話的で深い学びを実現するには、子供に自分自身をよりよく見つめる眼を育てることと、他者を媒介にして新たな可能性へと身を開く契機を意図的にデザインすることが重要である。それによって、自分の生活を振り返り、自分自身のよさに気付き、自己の在り方や生き方について考えることが可能になる。

そこで、生活科・総合部の研究テーマを以下のように設定した。

### 仲間との関わりを通して、対象への気付きを深める子の育成

## (3) 育てたい子供像

研究テーマを具現化するために、「育てたい子供像」を以下のように設定した（括弧内のことばは、これまでの本校の研究のキーワードを示す）。

- 身の回りの環境に思いや願いをもって働きかける子（「子供の論理」）
- 仲間との関係性をよりよくつくりかえながら関わり合う子（「受容」と「協働」と「メディア」）
- 自分の気付きや経験を生かしながら、新たな可能性を求めて活動する子（「こえる学び」）

## 2. 全体研究テーマとの関連

### (1) 生活科・総合的な学習の時間における「こえる学び」とは

生活科は、低学年という発達特性を念頭に置き、具体的な活動や体験を通した学びである。また、総合はそもそも探究のプロセスを重視することが強調されている。そのため、「こえる学び」を以下のように捉える。

第一に、「こえる」ということ、を子供が直面するさまざまな問題や課題を「乗り越える」こととして捉える。子供が自分の思いや願いを実現するためには、乗り越えなければならないさまざまな問題がある。例えば、つくった割りばしでつぼうがうまく飛ばなかったり、野菜の芽が虫に食べられてしまっているとき、そのような問題を「乗り越える」(overcome) ために、子供たちは試行錯誤や仲間と協力をしたり、自分自身の活動や学び方を振り返ったりする。

第二に、そのような積み重ねとして、子供たちは対象への気付きを関連付けたり束ねたりしながら、対象への実感的な理解を広げる。そして、子供たちの体験はより豊かになり、対象への思いや願いもより多様化・鮮明化し、対象への興味や憧れ、新たな問題意識を抱くようになる。また、自己効力感や達成感を味わうことによって、生活者・学習者としての自信を培う。このような姿は、子供が身近な世界から未知の世界へと「踏み出す」(advance) ことであり、よりよく生活しようとする自分を求めて世界や学び、自己を「拡張する」(expand) ことでもある。

第三に、気付きや情報を体験に生かして行為したり関連づけて考えたりすることで、より新たな見方や多面的な考え方ができるようになる。それは気付きを通して対象への見方が豊かになり、気付きを「磨く」(refine) ことである。

第四に、生活科や総合では、他教科・領域との関連や既習内容の活用という視点から、そもそも知の総合化を重視している。それは、生活科や総合を閉じた学習活動にするのではなく、他教科・領域へと越え出て、活動を活性化し、生活実践化することを意味している。越え出ること、学習対象としての他者や仲間にも当てはまる。学級や学年を越え

た交流や、学校空間を飛び出して地域のさまざまな人々や環境へと働きかけることでもある。このような「越境」(cross-border)もこえる学びを構成する重要な視点である。

そして第五に、以上のような学びによって、子供自身が豊かに「肥える」=よりよく「成長する」(develop)ことが、自立の基礎を養うことであり自己の生き方を問うことである。

## (2) 生活科・総合的な学習の時間における「子供の論理」

生活科や総合の学びは、人や環境と関わり合いながら展開される。そして、子供は自分なりのものの見方や考え方を、具体的な活動や体験を通して形成し、思考や表現、行為へと結ぶ。そこには、子供固有のもの見方・考え方とその展開の道筋がある。生活科・総合部では、長年「子供の論理」を以下のように捉えてきた。

**活動を通して生まれた、対象や自分自身についての気付き、興味や好奇心、自分なりの思いや願いをもとにした思考の道筋**

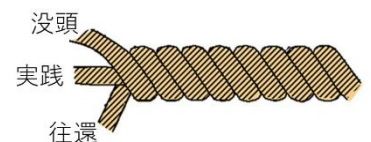
## (3) 全体研究テーマの側面から見た子供像の具体化

以上のことから、生活科・総合部では「こえる学び」の姿を以下のように捉えた。

- 気付きや経験を繰り返しながら、活動への思いや当事者性を強くする子
- 仲間や環境との関わりを通して、自分自身への気付きを深める子
- 自分の経験を生かし、他教科の学びを活用する子
- 仲間との協調や葛藤を乗り越えながら、活動をつくりかえていく子
- 自己実現に向けて、予想・意図・期待をもって活動する子
- 自分の生活を見つめ直したり生かしたりしようとする子

## (4) 「こえる学び」に必要なもの

生活科や総合の場合、基調提案で示された「没頭」「実践」「往還」という視点は、授業において個別に設定し、作用するものではない。没頭や往還は、子供が活動に時間も我も忘れて集中し、夢中になり、熱中するとき生まれ、知的にも情緒的にも楽しむとともに、今を乗り越えよりよい未来を指向する姿そのものである。必然的に、そこでは既存の経験や気付きを生かし、深く考え、繰り返し関わろうとする姿が現れる。それこそが、本校で捉える実践の姿である。それはあたかも、1本の紐が分析的に見ると3本の糸によって撚り合わさっていることに似ている。そのような豊かな状況や学びの文脈=学習環境を構成することが重要である。そのため、以下のような視点を設定し、研究を進めることにした。



### ① 活動の足あとを可視化するメディア

「子供の論理」は、その時、その場でその対象と関わる中で生まれてくる。そのため、活動や体験の足あとを意図的に残し、保存し、可視化し、提示することは教師にとっての重要な支援である。なぜなら、子供自身が参照しながら考えたり振り返ったりすることを可能にするからである。例えば、植物栽培活動の活動歴や探検活動での探検マップ、交流活動でのクラスマップ、板書記録などは、学級としての活動の足あとを保存し、<今-ここ>における意味付けを考えさせ、これから先の活動の方向性を見通すメディアとなる。

### ② 振り返りカードの工夫

活動の中で意識的・意図的に自分自身の学びを振り返ることは容易なことではない。そのため、振り返りの場面に意図的に設定することが必要になる。その際、カードの形式を多様に工夫しながら、自分自身を見つめ、その先へと結ぶことができるような書式を開発・改善していく。

### ③ 他者との出会いを促すメディア

子供が自分自身のよさや課題に気付くとき、仲間との関わりの中で気付くことが多い。そのため、子供が仲間と出会い活動する空間構成や、子供相互の関係性にも着目する必要がある。自分とは異質で多様な「子供の論理」との出会いは、多面的な比較や反省的思考を促し、自分自身を見つめ直す契機となる。例えば、教室の机の配置を「コの字」型にしたり、本校特有のオープンスペースやベランダを活用したりするなど、教室環境の構造や導線を目的に応じて柔軟に組み替えることも重要な視点である。

### **3. 研究の重点**

学習環境をデザインする際に、個と集団の結び目をいかにつくるか、新たな人・もの・こととの出会いをいかに構想するかは重要である。それは、人・活動・文化的道具・教室空間・時間・学級集団・学級文化・カリキュラムなどをどのようにデザインするかということと同じだからである。その上で、子供にとっての思考の結び目と相互行為の可能性を開くメディアとなり得るものを見出し、布置することが必要である。

#### **(1) 子供の関わり質に着目した学習環境デザイン**

子供が対象への気付きを深めるためには、ともに活動する仲間との関係の深化が重要である。それは、親密さや安心感、楽しさといった学びの同伴者としての意味のみならず、新たな見方や考え方に気付かせ、対象との関係を媒介するメディアとしても機能するからである。

#### **(2) 子供の作品の構築教材化**

表現活動を通して制作された作品を新たな教材とする視点は、子供が他者と出会う契機となる。子供の作品は、学び合う学級集団の仲間にとっては、共有する活動の文脈や経験を背景にしたものであり、それ故に相互理解に開かれ、他者の眼と感性を通して対象へと接近し関わることを可能にするメディアでもある。また、他者に開かれることで、新たなよさや可能性に気付くことも可能になる。

#### **(3) 学級カリキュラムの協同構築**

子供が主体性を発揮し、活動に没頭するには、活動そのものが子供たちの思いや願いを実現するためのものとして意識付けられていることが大切である。そのため、学校カリキュラムを参照しながらも、学級の中で子供たちと活動のストーリーを紡いでいく展開を大事にする。

#### **(4) 子供の気付きを深める振り返り活動の工夫**

子供は、自分自身や自分の成長を振り返りの場面で気付くことが多い。振り返りの方策も、個としてのみならず、他者と共に対話的に振り返ったり、集団の中で振り返ったりするなど多様性に満ちている。振り返り活動を意図的に設定しながら、自分の活動のよさや気付きの価値、成長の姿に気付くことができるための方策について探る。

### **4. 成果と課題**

#### **(1) 研究の成果**

#### **(2) 今後の課題**